



### 東京五輪に思うこと

東京五輪・パラリンピックは、開幕まで2週間を切りました。コロナ禍の開催に懸念も残る中、どんな大会を目指し、どんな意義を見出そうとしているのでしょうか。

思えば、**1964年の東京五輪**は、世界にむけて戦後復興をアピールすることができる絶好の機会であり、まさに国民悲願の一大国家行事であったような気がします。大会に向けて、**高速道路や新幹線など交通網の整備、競技場の新設など、壮大な準備を整えて**開かれたオリンピックは、素晴らしい開会式や閉会式、スムーズに執り行われた各競技、選手村運営の見事さなど、どんなにか各国選手や役員を驚かせたことでしょうか。開会式の**10月10日**は、好天気確率が最も高い日であったはずが、前日になって悪天候が心配されました。しかし、当日のテレビ放送の実況中継のアナウンサーの「**世界の青空を、ここ東京に全部集めたかのような快晴です!**」の名調子と、ブルーインパレスが大空に描いた五輪マークは、多くの人々の脳裏に長く印象に残るものでした。そして、聖火を手にもつ、**十九歳の主役が国立競技場に入ってきます。最終ランナー坂井義則さん**は、当時早稲田大競走部の一年生で、**原爆が広島に落ちたその日、広島県内で産声を上げたという、東京五輪の申し子**にふさわしい青年でした。(私も同じく終戦の年に生まれた同じ大学の一年生、学籍番号も**64-456**と、東京五輪の年の入学を証明するものとなりました。)この大会で日本選手団は大活躍、金メダル**16**個、銀メダル**5**個、銅メダル**8**個の合計**29**個を獲得して、国別順位も**3**位となるなど歴史的快挙を残しました。その後、「**平和の祭典**」であるはずのオリンピックも、「**国際政治情勢**」に翻弄され続け、全世界で加速する「**商業主義**」の波にも巻き込まれます。**1980**年のモスクワ大会は、ソ連のアフガン侵攻を非難する西側諸国はボイコットしました。次の**1984**年のロサンゼルス大会は、ソ連をはじめ東欧諸国の不参加での大会となりました。その中でも、ロサンゼルス大会の組織委員会が徹底的な商業主義路線の運営を行った結果、黒字の五輪を達成しました。スポンサー企業から多額の資金を得て、大会のマークやマスコットをライセンスとして商品化し、テレビ放送を意識した運営がされました。その後の大会も米国時間を意識した時間帯で、各種競技が運営されています。(此度の東京大会も、米国のゴールデンタイムに人気種目のファイナルマッチが企画される筈です。)

さて、**コロナ禍の東京五輪2020の開催の是非**の論考で喧しい中、元東京都知事の**猪瀬直樹氏**は月刊**Hanada**(8月号)で、「何よりもコロナ禍の今だからこそ、人間の限界に挑戦する選手の活躍から勇気をもろうことが夢の力に繋がる。…大リーグで活躍する**大谷翔平選手**の結果を気にしながら…**今日の大谷はどうなったかな。よし打った!**と毎日のように気になり、自分までも嬉しくて仕事に力が入る。…オリンピックで活躍する選手には、日本代表というだけで応援するし、メダルを取ると嬉しい。普段は国家について考えていないにもかかわらず、…国民国家の一員であるという意識を持つ。日の丸のゼッケンをつけて走るオリンピック選手を応援してつい興奮してしまうのは、ナショナルな心情が血肉化しているからだ。」と論じています。至極当たり前の感覚と私は思うのですが…

